

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	美術教育におけるモダンテクニックの特性：小学生を対象にしたワークショップの実践から子どもの表現の展開に着目して
Author(s)	小室, 明久; 笠原, 広一
Citation	初等教育カリキュラム研究, 7 : 135 - 145
Issue Date	2019-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/47445
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047445
Right	Copyright (c) 2019 初等教育カリキュラム学会
Relation	



美術教育におけるモダンテクニックの特性

— 小学生を対象にしたワークショップの実践から子どもの表現の展開に着目して —

小室 明久¹, 笠原 広一²

要約

美術教育においてモダンテクニックは小学校だけでなく多様な年齢の実践の場で用いられている。しかし、その特性を活かした実践の創出には課題もある。そこで、本研究では大学の公開講座でのモダンテクニックを用いた生き物図鑑づくりのワークショップを通して、モダンテクニックによる偶発性を活かした活動から生まれる素材を子どもの表現へと結び付けることによって生まれる、子どもの表現の広がりについて考察した。実践の考察の結果、子どもはモダンテクニックによって生まれた色や形の特徴を生き物の素材に活かしており、それが生き物を構想するアイデアにもつながっていた。モダンテクニックによる偶発的な色と形の効果が、子どもの発想や構想を広げ、イメージ創出の方法となることが明らかになった。

キーワード：モダンテクニック，美術教育，表現

1. 美術教育におけるモダンテクニック

モダンテクニックとは芸術制作において自身の意図的表現とは異なる偶発的な表現効果を作品制作に取り入れた表現技法のことである。クレヨンや鉛筆で形をこすり出すフロッタージュなどは幼稚園や保育所、小学校低学年でも広く行われており、幼児でも浮き上がってくる形と色の面白さを十分に楽しむことができる。その他、デカルコマニー、スクラッチや吹き流し、スパッタリングなど様々なモダンテクニックの技法が美術教育の中で普及している。様々な発達段階での実践にも対応し、偶発性に加えて遊びの要素も含むことから幼児や小学校低学年を中心に広く行われており、予想外の表現が生み出せる面白さもあって中高学年や大人の造形活動でも取り入れられている。また、教員養成課程でも図画工作などの指導や保育の造形分野の授業でも取り入れられており、中西は美術や図画工作が苦手な教員志望の大学生に対してモダンテクニックを用いた実践の指導を行っており¹⁾、教師や保育者にとっても慣れ親しむ機会が多い表現方法である。

モダンテクニックの実践について佐々木は、表現技法として本格的に用いられるのは中学校美術科だとし、モダンテクニックとは「様々な描画材料の特性を利用して、造形的な効果を得る表現技法である」²⁾と説明している。そして写実的な表現とは異なり、オートマティックな行為による偶然の形や色の効果を生み出すものであり、シュールレアリスムの作家たちが好んで用いて色や形から無意識

¹ 東京学芸大学 個人研究員

² 東京学芸大学

や深層心理を表したり、造形の素材や効果の技法研究においてはベーシックデザインや構成教育の内容と位置付けられたとする。

モダンテクニックは技術的な巧拙が現れにくく、偶然を含んだ予想外の新鮮さや表現効果が得られるため、苦手意識を持つ児童や生徒にとっても、意欲を喚起し、創造力を刺激し、積極的に表現を楽しむようになる点で効果的とされるが、学習のねらいが伝わらないと単なる体験に終始してしまう。無意識的に表現を量産できるため、「結果に対する美的な判断、色や形から得られるイメージを常に意識させながら指導にあたる必要がある」³⁾ という。こうした指摘を踏まえた上で、モダンテクニックの表現効果と指導における課題点をもう少し詳しく見ていこう。

河野は美術教育におけるモダンテクニックを用いた題材に関して、戦後の民間教育団体である創造美育協会との関連の中で考察をおこなっている⁴⁾。創造美育協会は子どもの創造性を育むことを主張し、創造性を引き出すために自由に作品を作らせ、製図などの実生活に即した技術を中心とした指導からの転換を推し進め、自由に作る過程で子どもが自ら能動的に制作に取り組む姿を評価した。描画でも遠近法のような技術を求めるのではなく、いかに子どもが夢中になって取り組んでいるかという制作過程に着目するなど、創造美育協会は子どもの生き生きとした姿を求めた。河野はこうした戦後の美術教育を牽引した創造美育協会の取り組みを踏まえながら、モダンテクニックを用いた教育の実践における変化について次のように述べる。

「戦後美術教育の变成は、創美のような教育の方法的な変化だけでなく、教育の実践的な変化の相として見ていくことができる。その中でもモダンテクニックを用いた実践は、子供たちの絵の明らかな変化の相として現れる。それは、モダンテクニックという技法が直接絵に反映することで、かつてない絵の変化をもたらしていく。そこでは、技法がその実践の意味を形成するかのような振る舞いを見せる。実践は、技法を駆使する子供たちにおきる変化と、子供たちのそこでの熱中や、絵を形成する試みの多様さとして報告される。」⁵⁾

このように、モダンテクニックによって現れる様々な画面の変化は子どもの関心を惹き、子どもの生き生きとした姿を引き出す戦後の美術教育の理念に適った方法であり題材として取り上げられるようになった。

しかし、一方には批判もある。佐藤はモダンテクニックを使ったコラージュ制作を例に挙げ、モダンテクニック本来の理念から離れて表面上の美的効果しか求めない美術教育の現状に、美術教育の理念の形骸化と虚構化を見た⁶⁾。また、モダンテクニックによる表現はモダニズムにおける芸術を教える実践ではなく、子どもの表現を捉えるための実践に位置づけられているため、芸術の文脈で美術を学ぶことにはあまりつながっていない点に批判がなされた。モダンテクニックの教育的意義については、隈らが絵画指導とは異なる子どもの表現の広がりがあると述べている⁷⁾。隈らはモダンテクニックの先行事例を挙げ、「これらの発表原稿においては、対象が幼児や障害児であり、いずれもこの技法を使用することによって、表現に対する抵抗を取り除いて意外性を子供に与え、単に表現のおもしろさを感じさせる技法であることを紹介している」⁸⁾と述べている。また、小学校における実践では低学年から高学年までの実践を行い、以下のように述べる。

「小学校では、手の動きの発達に合わせて、描画行為の幅が広がっている。それによって、描画行為から受ける感覚を味わう段階から、描画行為によって生まれる色や模様を楽しむ段階へと変化している。

また、互いの取組や作品に対する関心が、学年があがるにつれて高まっている。表現の始まりでは、自分で描画行為や色を選んでどんどん試している子供がいる一方で、その様子を観察して自分の表現に取り入れようとする子供や、描画行為の効果を確かめてから始めようとする子供などがいる。表現の終末では、デカルコマニーによる偶発的な表現を喜んだり、驚いたりしながら、感じた気持ちを友達と交流しようとしている。」⁹⁾

このようにモダンテクニックを用いた実践ではその偶発性が着目され、偶発性はモダンテクニックによる効果として子どもの興味関心と結びつけられている。さらに、技術差があまり見えにくい点にも着目できる。技術を求めないモダンテクニックによる取り組み易さから幅広い年齢に応用されており、発達段階に応じた着目点や教育的効果について考えることも、モダンテクニックを用いた実践上の特色だと言える。これらモダンテクニックの研究を整理すると、モダンテクニックの特色と課題点は次のようにまとめることができる。

〈特色〉

- ・年齢に関係なく取り組むことができる応用性
- ・偶発性による表現
- ・モダンテクニックそれ自体が子どもの表現として直接現前される
- ・モダンテクニックの効果による子どもの興味関心への惹きつけ

〈課題点〉

- ・表面上の効果を狙うことで本来の意義や理念から離れ空洞化してしまうこと
- ・題材の目的に沿うことなく体験のみに終始してしまうこと

図画工作が苦手であっても様々なイメージを生み出すことにつなげていける方法であることがわかるが、題材の目的とあわせて表現効果が意識されなければ、その表現方法としての可能性が生かされない。本実践研究ではこうした特色と課題点を踏まえ、大学の公開講座でモダンテクニックを用いたワークショップを企画実施し、モダンテクニックによる偶発性と子どもの表現を結び付けて考察を行った。

2. モダンテクニックによる実践

2.1. 実践の概要

実施の概要は以下のとおりである。参加者は19名だが研究協力依頼に基づき協力が確認できた18名を対象とした。参加者は低学年児が中心であった。実践は連続4時間であること、実施者側スタッフが複数いることを考えれば、学校での実施と条件が異なることは確かであるが、モダンテクニックの可

能性や題材の可能性の検討という点では参考にできるところが多々あると考える。

題材名：発見！生き物新図鑑づくり

日時：2018年8月24日（金）10：00～15：00

場所：東京学芸大学 芸術・スポーツ科学棟4号館 美術教育演習室

実践者：笠原広一

補助：小室明久（記録も担当）、他に学部3年生（1名）、研究生（2名）

参加者：18名：1年生（5名）、2年生（10名）、3年生（2名）、5年生（1名）

2.1.1. 目的設定

本実践は東京学芸大学公開講座として行われた。実践は笠原が行い、小室が実践を補助しつつ記録を行った。他の3名が活動の補助を行った。実践の目的であるが、先の二つの課題点はいずれもが、表面上の表現効果の面白さにばかり目が奪われ、その体験自体が中心的となってしまう、偶発性や意図的選択も含めて、生み出された色や形から自分なりのイメージを想像して創り出すところに活動の焦点が向きにくいという点にあった。本実践での考察では、モダンテクニックを用いた表現における造形的な見方や考え方を浮き彫りにし、表現の広がりが見られる筋道を示すことである。

2.1.2. 展開

4時間の活動時間は、前半部で「吹き流し」、「スタンピング」、「デカルコマニー」、「スパッターリング」の4種類のモダンテクニックによる表現を行った。その後、それらを素材に、想像した新しい生き物をイメージしてスケッチした。後半部ではそれらを基に、生き物新図鑑に収録する生き物を紹介する作品1ページを各自がコラージュで制作し、生き物の名前、どこに住んでいて何を食べるのか等の説明を記入した。それを人数分からコピーし、各自台紙に全員のコピーを一枚ずつ糊付けし、コラージュや描画によってオリジナルの表紙をつくり、生き物新図鑑を完成させた。図鑑が完成したら自身のつくった生き物を紹介し鑑賞を行った。

2.1.3. 記録と倫理的配慮

保護者には事前に研究協力依頼に基づいて説明を行い、論文発表やプライバシー保護に関して同意を得て活動を行った。実践者と補助者は参与観察をしながらデジタルカメラで子どもの制作の様子と作品を記録した。保護者には終了後にアンケートに記入をお願いした。

2.2. 実践結果

前半部での「デカルコマニー」、「吹き流し」、「スパッターリング」、「スタンピング」（図1）の制作では、表現行為とそれが含む偶発性による予期しない色や形の美しさや面白さが生まれた。後半のコラージュによる生き物づくりでは、前半部でつくったモダンテクニックによる表現素材をスケッチしたイメージを基にその色や形の効果を考えながら作品化していた。以下の図2から図19に作品を示し、それが用いているモダンテクニック、その色や形の効果をどのように用いて生き物の発想や構想を広げ、イメージを創出しているのかを示す。



図1 左からデカルコマニー，吹き流し，スパッタリング，スタンピングの例

<p>図2 「ドラゴン」 (2年生)</p> <p>デカルコマニーによる茶色に水色やオレンジが混ざり合った濃い色合いの素材でドラゴンの体をつくり，スパッタリングによる淡い霧状の模様で透明感のある羽の軽さを表現している。肉食だそうで，茶色の体がそれをイメージさせる。</p>	<p>図3 「ドラゴンサウルス」 (1年生)</p> <p>緑の上に青い丸をスタンピングした模様を亀の甲羅に見立てた。首から顔は図1同様にデカルコマニーの茶色の濃い色で表し，ヒレはスタンピングで半透明のヒラヒラと動く感じを表している。</p>
<p>図4 「きろこさうす」 (1年生)</p> <p>スパッタリングを用いた素材を生き物の中心として，その上に濃い色合いの素材で模様を作っている。また，吹き流しによる素材も模様として用い，濃い色合いの素材と合わさって模様を表現している。</p>	<p>図5 「天ガメ」 (2年生)</p> <p>亀をモチーフとした生き物は，甲羅にスパッタリングを用いている。また，吹き流しによる素材を腕に用いるなどそれぞれのモダンテクニックによって現された効果を切り取り，顔や，模様と分け生き物を作っている。</p>
<p>図6 「ガンキュウ」 (2年生)</p> <p>茶色に水色と赤が混ざったデカルコマニーによる素材を目として用い，スタンピングを生き物の身体として表現している。目や身体の中心と対比して色合いは薄く，より目を際立たせている。</p>	<p>図7 「ロクボシオオてんとう」 (2年生)</p> <p>デカルコマニーによる表現のみを用い，できた形に鉛筆で目や口，六つの星を描き，てんとう虫にしている。デカルコマニーがつくりだす左右対称の形を生かし，周辺部に伸びた黄色を手足に見立てている。</p>

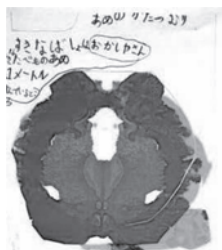


図8「あめのかたつむり」(2年生)

デカルコマニーによって現された形をかたつむりの甲羅に見立てている。色も赤系を中心に構成されている。



図9「かお二(ふた)ちょうちょ」(2年生)

デカルコマニーで左右対照的になった形で蝶の羽を表した。左右の先端の黄色い部分に目と口が見え、顔が左右に二つあるように見える。吹き流しで住んでいる草むらを表した。



図10「大虫食い」(3年生)

生き物の大部分を吹き流しによる素材によって構成している。吹き流しの偶発的な流れの跡を手足に見立て、それに沿って切り取って作っている。

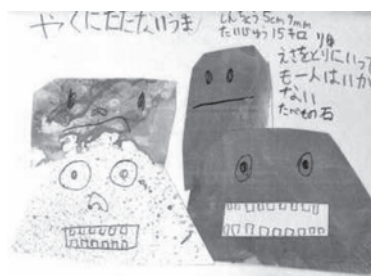


図11「やくにたたないうま」(2年生)

全部で四体いる生き物でそれぞれに顔が描かれている。吹き流しやスパッタリングなどの素材で生き物が作られている。



図12「こっぴたいちょう」(1年生)

スタンプの色面の中の一部を使って小さな生き物を作った。住んでいるところが箱の中であり、箱に住んでいる生き物のイメージをシンプルに表した。



図13「ガイキリザウルス」(2年生)

黄色い円を中心に配置し、吹き流しによる淡い表現で顔の部分構成している。また、名前の部分もスパッタリングとスタンプによって作られている。



図14 「メラメラドラゴン」 (3年生)

デカルコマニーの左右対称性で体から出る肩や足を表している。生息地が火山であり体も赤いマグマが地底から湧き上がるような形のイメージになっている。



図15 「ヨドラゴン」 (2年生)

スタンピングで表現された身体はグレーがかっている青色で構成され、住んでいるところが南極というイメージである。対照的に顔は濃い赤色で作られている。

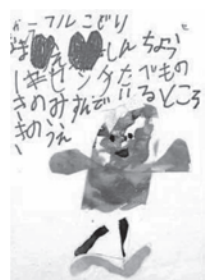


図16 「カラフルこどり」 (1年生)

スタンピングによる混ざり合った色紙を鳥の体にし、吹き流しによって絵の具が流れた線と鳥の細い足と、住んでいる木の枝を表した。名前にあるカラフルな小鳥を、素材を吟味して表現している。



図17 「カラフルトリ人間」 (2年生)

スタンピングの混った色で体を作り、黄色い部分に切り込みを入れくちばしとし、鳥らしさを表した。目はスタンピング、枝は吹き流し、スパッターリングで透明感のある雲や空気を表した。



図18 「ぞうにんぎょ」 (1年生)

吹き流しによる素材を鼻に見立て、さらに足元はヒレを作り、象の人魚を表現した。顔から身体の部分にはデカルコマニーを用い、足元にはスタンピングなど多様な素材によって構成されている。



図19 「にじ鳥」 (5年生)

デカルコマニーによる素材を鳥の形に切り取り、表現している。くちばしと羽根は赤く、頭の水色と首の黄色、羽根の一部分が深い青色と色鮮やかなのに対して、にじ鳥が立っている地面はスパッターリングによるくすんだ色を用いている。

3. 考察

上記の各18点の作品の考察からモダンテクニックが生み出す色と形の効果をどのように用いてイメージを広げ形にしているのかが見えてきた。



図20 コラージュのコピーを台紙に貼る



図21 完成した生き物新図鑑

① 色合いとその濃さや薄さを活かしたイメージづくり

図2のドラゴンではその力強い体を茶色のデカルコマニーを用いて表した。説明に肉食とあるのも、この茶色のイメージであると考えられる。図2と図3のドラゴンサウルスもスパッタリングで色が細かな霧状に広がったもので羽やヒレなどの動く部分の軽やかさを表している。図4と図5においても淡い色合いと濃い色の素材を組み合わせ、図6も特徴となる部分を濃い色合いによって表現している。このように、色合いとその濃さや薄さを活かし、生き物のどの部位をどんなイメージで表すかを工夫して形にしていることがわかる。

② 偶発性による形を活かしたイメージづくり

図7と図8、図9はデカルコマニーの偶発性を活かした形からイメージを広げ、生き物を作っている。図7はてんとう虫をイメージし、図8はかたつむりとして見立て、図9は蝶の形として捉えている。図10では吹き流しの形を生き物の手足として見立てているなどモダンテクニックの偶発性による形から生き物をイメージしている。

③ 色と形によるイメージの発想

図11ではそれぞれのモダンテクニックによって表現された形や色を自分の作りたいイメージに沿って制作している。また、同じ顔を描きながらも、それぞれのモダンテクニックによって異なる描画となっている。図12では形から箱に住んでいるという特徴がイメージできるような生き物を作っていた。図13では生き物の名前をスパッタリングとスタンピングの色を活かし制作した。図14と図15ではそれぞれの色から特徴となる名前や生態をイメージしている。

④ 混色によって表現された色合いによるイメージづくり

モダンテクニックによってそれぞれの形だけではなく、色の混色も偶発的に多様な色ができる。図16と図17ではカラフルという名前を冠しているように鮮やかな色合いが特徴となっている。図18ではそれぞれの色合いを生き物の身体の多様な部分に素材として用い、図19ではデカルコマニーによる混

色をにじ鳥という名前で表現し、スパッタリングで構成した地面を配置することによって生き物を際立たせている。

これら4点の考察から、モダンテクニックによる生き物図鑑づくりは色と形の特徴を基にイメージを広げる子どもたちの表現を引き出していた。また、「③色と形によるイメージの発想」はモダンテクニックにおける色と形に基づくイメージの形成ではあるが、表現の発想がより引き出されたと言えるのは①②④の場合である。前半部での4種類のモダンテクニックでの表現は、意図しない色と形が生まれる面白さや行為自体の面白さがあることは確かである。この前半部での過程の中で、濃さや薄さ、色のイメージなど様々な表現素材が生まれることを体験しており、その後のスケッチによる言語化も交えて、モダンテクニックによる表現を生き物の豊かな発想に結び付けていたことがわかった。後半部の生き物づくりではモダンテクニックによって生まれた効果の色や形を自分の生き物への素材として構成していた。さらにそれは自分の生き物を作るためのアイデアにもなっている。モダンテクニックによる効果は子ども達の生き物のイメージを広げていたと言える。

子どもの年齢に着目を見ると、低学年が中心であるがモダンテクニックの取り組みやすさを活かし、偶発性を応用して作品を作っている。図3、図4、図12、図16、図18が1年生の作品である。図3ではスタンプング、デカルコマニーを用いて構成し、図4はスパッタリング、吹き流しによる素材を用いている。図12ではスタンプングの素材を一部使い、四角に切り取り生き物をイメージし、図16はスタンプングを中心に、吹き流しも用い、図18では吹き流し、デカルコマニー、スタンプングなど複数のモダンテクニックを素材としている。

そして、図2、図5、図6、図7、図8、図9、図11、図13、図15、図17が2年生の作品である。図2ではデカルコマニー、図5ではスパッタリングと吹き流しで構成し、図6ではスタンプングの上にデカルコマニーを配置し、図7と図8、図9ではデカルコマニーをそのまま配置している。図11では吹き流し、スパッタリングを用い、図13では吹き流しを用いている。図15と図17ではスタンプングを主に用いている。図10と図14が3年生の作った作品である。図10では吹き流しを用い、図14ではデカルコマニーを用いている。図19が5年生の制作したデカルコマニーとスパッタリングを用いている作品である。

1から2年生が中心であることとサンプル数が少ないため、それ以上の学年との違いまで詳細に考察することはできないが、複数の技法を用いた表現が低学年から見られた。5年生（図19）になると複数の素材のテクスチャーの違いを活かし、写実性も増すように見える。

4. 結論

モダンテクニックは描写力を問わず、偶発性も含め多様な表現効果が生まれることから魅力的な技法である。それゆえに体験のみに注目してしまい、造形的な視点や題材の目標が薄らいでしまう点があった。しかし、本実践で子どもの制作過程をつぶさに観察し、生き物の説明やイメージを、モダンテクニックによる素材の色や形の造形的な特徴と合わせて考察していくと、子どもたちはそうしたモダンテクニックの表現特性を活かして自分のイメージを広げながら生き物図鑑づくりを行っていたことがわかった。モダンテクニックによる表現効果は子ども達の生き物のイメージを広げていたと言える。

5. おわりに

偶発性による色と形の効果から子どもたちはイメージを生み出し、生き物へと構成する素材としてモダンテクニックを十分に活用していた。色や形を組み合わせる中で、生き物の様々な特徴についても発想が生み出されていた。それはモダンテクニックの体験の面白さにのみに終始しては見えてこない姿であり表現である。子どもの表現はモダンテクニックの色と形の効果から、豊かにイメージを生み出し広げていくことができる。それはモダンテクニックの持つ特性を捉え、より豊かな発想や構想、イメージの広がり結び付けていけるような授業構想によって可能になると考えるのである。

注

- 1) 中西亨, 2018, 「図画工作の指導者育成におけるモダンテクニックの活用と効果」, 『帝京科学大学紀要』, 14巻, pp.215-223
- 2) 佐々木宰, 2010, 「中学校のデザイン モダンテクニック モダンテクニックとは? 学習のポイントについて教えてください」福田隆真・福本謹一・茂木一司『美術科教育の基礎知識』建帛社, p.112
- 3) 同上, p.112
- 4) 河野令二, 2004, 「モダンテクニックの教育的意味の形成について～その導入期における実践と報告をめぐって～」, 『美術教育学』, 25, 美術科教育学会, p.207
- 5) 同上, p.204
- 6) 佐藤哲夫, 2018, 「近代社会の変容と美術教育」, 神林恒道 ふじえみつる監修, 『美術教育ハンドブック』, 三元社, p.60
- 7) 隈敦ほか, 2016, 「造形教育におけるデカルコマニーの意義」, 『富山大学人間発達科学部紀要』, 10巻第2号, pp.43-53
- 8) 同上, p.46
- 9) 同上, p.48

Characteristics of Modern Techniques in Art Education: Exploring the development of children's expression through a workshop for elementary school students

Akihisa KOMURO¹, Koichi KASAHARA²

1 Tokyo Gakugei University, Individual Researcher

2 Tokyo Gakugei University

Abstract

Modern techniques in art education are used for training not only elementary school students but also students of a wide variety of ages. In this research project, we examined the development of expression in children by reviewing the characteristics and issues related to modern techniques in art education, organizing an actual workshop using these techniques in an outreach program at the University, and linking an activity involving modern technique-based emergence to art expression in children. Modern techniques used in the workshop included streamers, stamping, decalcomania, and spattering, which were then incorporated into collages to form animals. During this activity, colors and shapes created via the effects of these modern techniques were used as elements in the creation of the animals and contributed to the artists' ideas on how to create their animals. Our observations suggest that the effects of each modern technique contributed to increased expressive potential on the part of the children in creating their animals.

Keywords : Modern Techniques, Art Education, Art Expression, Children, Collage